

2017年4月30日(日)

説教:「希望への召命」

聖書:出エジプト記1:15~22

去る12日に嘉手納基地で大規模な訓練が行われました。米軍の発表では、沖縄が攻撃された場合を想定した反撃訓練ということですが、しかし米国は北朝鮮を挑発してわざわざ危険な状況を招いているかのように見えます。この訓練で、自分たちは即戦争ができる態勢は整っているとアピールをしているわけです。「平和は力によってもたらされる」という信念をはっきり行動に移しています。

この緊迫した情勢の中で、ルターが残したといわれる「たとえ明日が世界の終わりでも、私は今日リンゴを植える」という言葉が響いてきます。リンゴを植えるという行為は、死や絶望に対する積極的な抵抗といえるのではないのでしょうか。

エジプト王は、寄留の民であるイスラエル人たちの数が増したのを見て、エジプトにとって脅威になると恐れます。そして二人の助産婦にイスラエルの男児殺しを命じます。その二人—シフラとプアは神を畏れる者だったので、エジプト王が命令に従いませんでした。絶大な権力を持つ王に逆らうことは、自らの命を危険にさらすこと。彼女たちはどうして、勇気をもって、このようにエジプト王の命令を退けることができたのでしょうか。

彼女たちは仕事柄、日々命の生まれる瞬間に立ち会い、神から与えられた命の不思議さ・尊さを実感する毎日だったでしょう。その体験が神への信頼を後押しし、その神への信頼が彼女たちの生き方と行動を定めました。しかも恐れを覆い尽くすほどの希望に満ちて、彼女たちは自分の道を選び取った。「神は、私たちに‘生きよ’とおっしゃっている。だから私たちの仕事は、命を奪うことではなく、命が生み出されるのをお手伝いすることなのだ」というふうな。

不安を神とするとき、私たちは自分自身も隣人をも絶望へと追いやります。目の前で起きていることが見えなくなり、間違った判断をします。それは、増え続けるイスラエル人を恐れ、根絶やしにしようとしたエジプト王の姿そのものです。しかし希望は私たちを未来に向かわせ、新しい生・新しい命を与えます。新しい生き方へと促します。私たちが希望を抱くことができるのは、努力や訓練によるものではありません。自分たちの神に向き直り、信頼する力をいただき、キリストと日々出会い直すこと。その中で私たちは生き生きとした希望をいただき、その希望の支配のもとに生きます。私たちは希望へと召されているのです。(國分美生)